67．私の「戦争経験」（追記版）

表題は紛らわしい。私は昭和 20 年 9 月生まれなので戦争は未経験。ここに記すことは叔父から聴いたことや叔母からもらった記事などからの情報、それに長兄が書き残したことなどからまとめたものである。自分の身近な人の話は、戦争未経験者にとってはこの上なく貴重だ。

叔父から「その話」を聴いたのは、小学6年か中学1年の頃かと思うが確かなことは分からない。叔父がどういう心境で12歳位の少年の自分に話したのかも分からないし、どういう話の脈絡の中で話したのかも覚えていない。聴いたのは叔父の家であった。それは日本軍が行った何ともむごたらしい話であった。話は短い時間だったかも知れない。私は聞き返すことも出来なかったが、話し振りから叔父は新兵としてただ見ているしかなかったのだと理解した。

長兄は叔父の従軍について文章を書いているが、それは軍隊手帳を元にしているから「その話」のことは書かれていない。その文章から従軍のことを簡単に記すと、昭和12（1937）年 18 歳で下士官志願兵として赤坂歩兵連隊に入隊、翌年下士官に昇進し2ヶ月後日中戦争（支那事変）の北支方面軍の指揮下に派遣される。匪賊討伐（当時はこう言ってたらしい）戦に 3 回参加したが、最後に敵の銃弾が岩に当たりその跳ね返り弾が腹部に命中した。が、一命を取り留めた。時に昭和16（1941）年 22 歳の時だった。これにより、「その話」の出来事は昭和13～16年の間の日中戦争の最中に発生したことになる。

叔父はその後内地で療養することになったが、昭和 20 年正月には赤紙（招集礼状）が来たというから驚きである。家族は再び武運長久や千人針などの入隊準備をしたという。ただ傷痍軍人ということで今度は甲府連隊の本部付に配属され、そこで終戦まで軍務に服したという。

ところで叔父は「その話」を私だけに話したのだろうか。だとすれば、胸にしまっておくことが苦しくなって衝動的にでも話したのだろうか。だが、それはどう考えても考えづらい。12歳位の少年だけに話す内容ではないだろうから。少人数でも、多分他の人にも話していたのではないか。そして誰もそのことを陽には話さなかったのではないか。その頃はまだ悲痛な歴史の風化を防ぐための語り部の活動はなかったのだろうから。

その後、叔父が悲惨な経験をどこにどう話したかは分からない。私は今から思えば、叔父が元気なうちにもっと聴き出すことをすれば良かったと悔いる。機会はいくらでもあったのだから。

8 月 10 日の朝刊の読者の声欄の「引き揚げで苦労した母」という小平市の方の文章を読んだ。「私をお腹に宿した母は、官舎に残された仲間の妊婦らと避難を始め、無蓋貨車に揺られ、時には広大な満州に沈む真っ赤な夕日を見ながら歩き続けた。途中、日本の敗戦を知る。ソ連兵は金銭を剥ぎ取り若い女性を連れ去るという。母たちはどれほどつらい思いをしたか。途中の関東軍基地で私が生まれ、母は私を背負い、持てるだけの荷物を両手に引き揚げ船に乗った」とある。『流れる星は生きている』（藤原てい）を昔読んだが、同じ様な経験をしたのだろうと思った。

叔母が朝鮮半島北部（北朝鮮）で警察官を務めていた夫と結婚したのは終戦前年の二十歳前のこと。翌年（1945 年）には長男（私の従兄弟）が誕生し幸せな期間だったというが、10 月には夫らはソ連兵に連行された。叔母は 46 年 8 月、リュックの上に 1 歳の子を乗せ、飢えに苦しみながら 38 度線を越え逃れた。将に声欄の記事のようなことだ。私の母から又聞きで聴いたことがあるが、叔母はソ連兵が追いかけてきた際は橋の下に隠れ、子供の泣き声が聞こえないように口を押さえていたという。叔母が 22 歳頃のことだった。短歌を嗜む叔母は後に当時のことを次の

ように詠(うた)っている。

宝とも思ひし衣類つぎつぎと売りて母子の飢ゑ凌ぎたり

朽ち果つる生命(いのち)にあれど奥深く刻みてありし苦難の引き揚げ

何とか引き揚げた叔母は夫の帰国を待ったが、調査もむなしく生死が確認できず、後に戦時死亡宣告により亡くなったことにした。

還らざる夫(つま)を待ちつつ声あげて一人泣きたる遠き日ありき

叔母は戦後 70 年の全国戦没者追悼式に、次のように詠(よ)んだ短歌を手にして出席した。

異郷にて看取る人なく逝きし夫(つま) 終戦七十年われは生きをり

叔母は芯が強く気高く、そしてやさしかった。気丈に生きた叔母を私は尊敬していたが、叔父の場合と同じように、叔母が元気なうちにもっと話を聴いておけば良かったと悔いている。

私の小学生の頃の経験で言えば、地元のお祭りの時など、杖ををついた傷痍軍人の方が義援金を乞うていたのを何回か見ている。「可哀想な人たち」との思いはあったが、何故か周囲の大人達は傷痍軍人に冷たい眼でみているような気がした。今から思えば色々なことが想像できるが、いずれにしても戦争の被害者には変わりなかった筈なのだが。

また小学生の頃にはタイトルは忘れたが、原爆の映画を町の映画館に全員で見に行ったことがある。原爆投下のキノコ雲やその後の悲惨な場面が映されていたのを覚えている。

叔父・叔母の話と小学生の頃の経験が私の戦争に対する思いの原点みたいなもので、年齢を重ねるにつれて、8月15 日には思い出すようになってきた。そして、広島・長崎・沖縄は誰もが訪ねるべきだと考えるようになり、定年後やっと実行した。戦争に対する学びは生涯続けなければならないと思う。

（2022 年 8 月 31 日、9 月 2 日追記）